

曾我量深の唯識思想について

——「如来表現の範疇としての三心観」を通して——

高 木 祐 紀

はじめに

曾我量深（一八七五—一九七二）は、真宗大谷派の僧侶であり、現代の真宗教学に大きな影響を与えた。

曾我量深の「如来表現の範疇としての三心観」^①では、『大無量寿経』に説く第十八願の至心・信樂・欲生の三心を『成唯識論』・『成唯識論述記』に説く阿頼耶識の三相に配当する。

しかし、『成唯識論』・『成唯識論述記』と『大無量寿経』は異なるテキストであり、阿頼耶識の三相と三心を同一に見ることはできない。にもかかわらず、なぜ三心を阿頼耶識の三相に配当したのか。そのことについて考察する。

小論では、まず、「如来表現の範疇としての三心観」にある阿頼耶識の三相について概観する。その後、『成唯識論』・『成唯識論述記』に説かれる阿頼耶識の三相の構造を確認する。次に、「如来表現の範疇としての三心観」に述べられる三心の構造と、『教行信証』に述べられる三心の構造を確認

する。その上で、阿頼耶識の三相と三心の構造を比較する。

「如来表現の範疇としての三心観」における阿頼耶識の三相について

初めに、「如来表現の範疇としての三心観」の題目の意味について確認しておく。曾我量深は、「範疇」について「如来の本願を主語とする現行的総合判断の賓辞」（『曾我量深選集第五卷』一五六頁）であると述べる。そして、三心について「三心といふのは如来が吾々に信心を發起せしめる所の本願の自証の道程である、随て我々が如来の願心に転入する自覚の道程である」（『前掲書』一五六—七頁）としている。

よって、題目の意味は、我々が信心を獲る道程が如来の本願の三心によって表されたといえる。

次に、「如来表現の範疇としての三心観」における阿頼耶識の三相とその構造について見ていく。

曾我量深は、自相について「一切の自覚を総合せる根本自

曾我量深の唯識思想について(高木)

覚意識」(『前掲書』一六三頁)と解釈する。さらに、「此の阿頼耶の自相即ち自覚相、自覚体といふものは常恒に平等に相続流転する意識の現在である。」(『前掲書』一八五頁)とし、自相は現在を表すとしている。

果相と因相については、

詰り阿頼耶識の理想的極限には因相があり現実的極限には即ち果相がある。そこで阿頼耶識即ち絶対自覚意識、即ち諸の自覚意識自体なる根本自覚の現実相が即ち果相であり、因相は其の理想である。(『前掲書』一六五—六頁)

と解釈する。さらに、「阿頼耶の上の果相異熟識といふのは、之は詰り現在の上の過去の義相でありまして、過去といふものは別にあるもので無い。それに対して因相種子識といふものは、それは未来の義である。」(『前掲書』一八七頁)と述べる。

よって、果相は現実の相であり過去の義を持ち、因相は理想であり未来の義を持つ。

次いで、阿頼耶識の三相の構造については次のように述べる。

阿頼耶の三相といふも体が三つあるのでなくして一体二義である。即ち阿頼耶の自相の中に果相と因相との二つを成就綜合せられて、果相といひ因相といふのは、一見すれば右と左といふ風に、果相は有限なる義相であり、因相はこれ無限なる義相である。

以上のことから、自相・果相・因相の構造は、次の図のように表すことができる。



『成唯識論』・『成唯識論述記』における阿頼耶識の三相について

『成唯識論』には、自相・果相・因相の構造について次のように説いている。

因と果とを撰持して、自相となすが故に。

(『大正新脩大藏經』三一 七頁c 原漢文)

また、『成唯識論述記』には次のように説いている。

自体は是れ総なり。因と果とは是れ別なり。自相は因と果の二相を撰持して自体と為すが故に。撰は是れ包含の義なり。二(因相と果相)を包みて一(自相)と為すが故に。

(『前掲書』三〇一頁a 原漢文 括弧筆者注)

つまり、因相と果相の二つを包んで自相となすのである。

さらに、『成唯識論述記』に、

二(因相と果相)を離れて総(自相)無し。二を撰めて体と為す。二は是れ総の義なり。総は是れ義の体なり。

〔同〕 原漢文 括弧筆者注

とある。因相と果相を離れて自相は無く、因相と果相をおさめて体となすのである。図で表すと次のようになる。



「如来表現の範疇としての三心観」における三心の構造について

曾我量深は、三心の構造について次のように述べる。

至心といふものは、信樂の自覺を通して欲生を展開して来る。要するに信樂の一つに至心も欲生もおさめられる。詰り体は信樂即ち信心の一つである。〔曾我量深選集第五卷〕二〇六頁

ここでは、至心と欲生は信樂におさめられるとしている。さらに、「至心信樂欲生の三心といへども、信樂といふ自相の中に、至心の果相、欲生の因相が総合せられて居る。」「〔前掲書〕一六九頁」と述べている。図に表すと次のようになる。



そして、阿頼耶識の三相である自相・果相・因相と『大無量寿経』に説かれる至心・信樂・欲生の三心を次の図のよう

曾我量深の唯識思想について (高木)

に配当する。

自相——信樂
果相——至心
因相——欲生

〔前掲書〕一六八頁

『教行信証』における三心の構造について

曾我量深は三心の構造について、「信樂の一つに至心も欲生もおさめられる」としていたが、親鸞のどの文によっているのであろうか。

親鸞は、至心・信樂・欲生の構造について『教行信証』「信巻」に次のように述べている。

明らかに知りぬ、「至心」はすなわちこれ真実誠種の心なるがゆえに、疑蓋雑わることなきなり。「信樂」はすなわちこれ真実誠満の心なり、極成用重の心なり、審驗宣忠の心なり、欲願愛悦の心なり、歡喜賀慶の心なるがゆえに、疑蓋雑わることなきなり。「欲生」はすなわちこれ願樂覺知の心なり、成作為興の心なり、大悲回向の心なるがゆえに、疑蓋雑わることなきなり。今三心の字訓を案ずるに、真実の心にして虚仮雑わることなし、正直の心にして邪偽雑わることなし。真に知りぬ、疑蓋間雑なきがゆえに、これを信樂と名づく。信樂はすなわちこれ一心なり。一心はすなわちこれ真実信心なり。このゆえに論主建めに一心と言えりなり」と。知るべし。〔親鸞聖人全集〕教行信証1 一一六頁 原漢文

では、具体的に三心の構造はどのように示すことができるのか。曾我量深は、「至心の釈を信樂の「信」の字におさめ、

曾我量深の唯識思想について（高木）

欲生の釈から「欲願樂」を「樂」におさめて、至心と欲生とが信樂の一つに悉く内含してあることを表わされる。」（『曾我量深選集第八卷』二五八頁）としている。よって、曾我量深は、先にあげた『教行信証』の文から、至心と欲生が信樂におさめられると解釈しているといえるのである。

阿頼耶識の三相と至心・信樂・欲生の構造の比較

阿頼耶識の三相の構造と三心の構造を比較する。

『成唯識論述記』には、「自相は因と果の二相を攝持して自体と為すが故に」とあったように、果相と因相は自相におさめられる。そして、至心・信樂・欲生の構造は、至心と欲生が信樂におさめられるのである。

つまり、三相と三心の構造は、どちらも一つにおさめられるという点で一致しているといえる。このことから、曾我量深は三相と三心の構造が一致していることに着目し、阿頼耶識の三相と至心・信樂・欲生を結びつけたと考えられる。

おわりに

小論では、阿頼耶識の三相と至心・信樂・欲生の構造という点から考察した。その結果、三相の構造と三心の構造が一致しているという点が明らかになった。

今回は構造の一致についてのみ言及したが、今後は三相と

三心の内容を比較検討したい。なぜなら、果相は過去の義を持ち、因相は未来の義を持つといった曾我量深の解釈は、『成唯識論』・『成唯識論述記』には記述されていないからである。

1 『如来表現の範疇としての三心観』は昭和二年五月に真宗学研究所から刊行された。その「序」には、「本書は、本所の第二回秋季講座（大正十五年秋）に於て講述された講義の速記録である」という旨が記されている。

〈キーワード〉 曾我量深、阿頼耶識、自相・果相・因相、三心

（同朋大学大学院）